〈翻訳と解題〉
エンニャ・ウィルキンズ
「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉── 未発表のテクストとともに」(1)

白坂彩乃・大川　勇

ローベルト・ムージルの小説『特性のない男』[1] で言及されることの多い〈少佐夫人恋愛事件〉は、読者にとっては非常に魅力的だが、ひとたび分析しようとするとかなり困難なテクストの一例である。その「恋愛事件」を詳しく見ていくと、ムージルの創作方法が見えてくると同時に、1920 年頃に書きはじめられたこの小説が 1942 年の作者の死の時点で未完であった理由についての手がかりも与えてくれる[2]。

『特性のない男』という物語の織物の独特さは、一つには自身の創作の「幽霊じみた」側面[3] と作者が称するものに由来している。その側面とは、人物や出来事や関係性の非個人的で一般論めいた、エッセイのような扱い方であり、それが接続法と不定代名詞 man が目立って用いられる文体上の手法[4] によって増幅されている。そこではあいまいさと未決定状態があまねく広がっており、オパールのような乳白光（opalescence）をたたえているが、それは二つの可能性のあいだをつねに揺れ動いていたムージルの精神の両極性のためである。しかしそのこと以外に、ヘンリー・ジェイムズが別の人物の小説〔ホーソーンの小説『七破風の屋敷』を指す〕について話したさいに「小説自身を超えていくように思われる、作者の側でのある複雑な目的」と称したものが感じとれる。ムージルはリルケの追悼演説（ここで彼は暗に自身の創作について多くを語っている）において、これをほとんどジェイムズが言った内容の直喩表現でまとめている。『特性のない男』第 1 巻第 115 章の、のちに改稿した比喩についての段落にならって、彼はこう言った。リルケの作品では、「事物は絨毯の図柄のように織りこまれている。それらの事物はじっと見ているかぎりはばらばらだが、その織地（Untergrund）に注意を向けるとたちまちこれが事物どうしを結びつけているのがわかる。そうすると事物の姿は変化し、事物のあいだの奇妙な関係が立ち現れるのだ」[5]。より自伝的な色合いを帯びているがゆえに多少異なった意味でではあるが、そのような「織地（Untergrund）」や「奇妙な関係（sonderbare Beziehungen）」はムージル自身に特徴的な創作の手法である。そこでは読者が知らない事柄や物語のなかでまったく機能していないエピソードが繰り返し立ち現れるのだ。ここに初めて公表される〈少佐夫人恋愛事件〉の草稿[6] は、そうしたエピソードのひとつである。そのストーリーは『特性のない男』のなかでほのめかされてはいるが、そこで語られたものとは内容上異なっている。

ムージルのメモを見れば、この「きわめて重要な」恋愛事件が主人公の性格の中心的対立のモ

デルとなっていることがわかる。つまり、作者と主人公ウルリッヒ（＝特性のない男）の双方に見られるように[7]、「食欲的な」（もたらす（agein）、世間でのしあがる、攻撃的な、性的な、「悪い」）生と「非食欲的な」あるいは「瞑想的な」（受けとる（pathein）、世間から退いた、受動的な、非性的な、「善い」）生のあり方の対立である。このモデルの使用例は、1938-39年の草稿「夜の会話」[8]〔クラーゲンフルト版では1937-1938年〕に、とりわけ興味深いかたちで見ることができる。

ウルリッヒと彼の妹アガーテはいつも通り自分たちの使命について議論している。ムージルが〈別の状態〉（der andere Zustand）と呼んだ、ごくまれに起こる非個人的な高揚状態としての「真の」生への統合について。そこに現れる生の全体性は初め「楽園」と呼ばれ、そして「王国（das Reich）」、さらには「千年王国（das Tausendjährige Reich）」、1933年以降には「忘我の結社（die ekstatische Sozietät）」、「愛の王国（das Reich der Liebe）」、最終的には（驚くべきことに）「地上の神の国（das Reich Gottes auf Erden）」と呼ばれている[9]。ウルリッヒはアガーテに、「外面的な行動の勝利」は彼にとっては「つねに縁遠いものであった」と言い、つづけてこう語る。

> 騎手が馬にたいして抱くのと同じ情熱を、僕は認識することに抱いていた。僕のなかでは認識することと、一見なにもしていない状態が拮抗していた。僕はそれを愛と呼んだ。必ずしも、一人の女性を愛するというのではなく。〔Mappe III/7/122〕

アガーテはこの二分法は神経症的だと言う。また、なぜウルリッヒは「自然と道徳の法則にしたがって、手を差し出す可能性を丹念に分析する」かわりに「さっさと手を差し出そうとしない」のかと尋ねる。それは「破滅をもたらす（verderblich）」と彼は答え、こう続ける。「〈少佐夫人の物語〉を君に話したことはあったかな？」。〈別の状態〉で生きるという二人の試みは「あんなふうに終わってしまってはならないのだ！（Es darf nicht enden wie die!）」〔Mappe III/7/122〕。

〈少佐夫人の物語〉には比喩的な意味での手を差し出すということ、つまり自分からおこなう肉体的行為が含まれており、その結果は惨憺たるものだったと言う研究者もいる。しかし小説中に詳しいことは語られていない。ウルリッヒとアガーテの会話のなかではそれ以前に一度だけ少佐夫人のことがほのめかされているが、それは第2巻第12章で偶発的に生じたものだ。そこでウルリッヒは「陶酔状態にある者たち」の悲哀について語る。それは「恩寵の状態から転落し、筆舌に尽くしがたい不快感を覚える」というものだ[10]。アガーテは「突然」、ウルリッヒが「そんなに愛した」のはいつのことかと尋ねる。彼の答えは、「だれか一人の女性を愛するのではない愛」しか経験したくないという思いから出たものだった。その愛とは、後の第22章で「山岳地帯での晩秋の日々」を彼に思い出させ、自分が「あらゆる欲望から遠く離れ、もしかすると愛の近くにいるのかもしれない」と感じさせたものである。そして第23章では、「初秋の日と同じくらいに肉体性のない、静止した、空気のように静かな、遥かな愛（Fernliebe）」と呼ばれてい

る[11)]。

> ああ、それについてはもう話したよ。僕は愛したひとから1000キロも逃げた。そして現実に彼女と抱きあう可能性はないと感じたとき、犬が月に向かって吠えるように僕は彼女に向かって吠えたんだ。[12)]

ウルリッヒとアガーテは魂の神秘的結婚について話しているのだろうか、それともトリスタンのようなロマンティック・ラブについて話しているのだろうか ── そう思う人もいるかもしれない。ムージルの作品に特有の乳白光は皮肉な言い回しによって、そしてまた語りの論理をぼかすことによっても色濃くなっている。というのも、ウルリッヒがアガーテに〈少佐夫人の物語〉を語っていたのなら、彼がそんなに愛したのはいつだったのかなどとアガーテが尋ねる必要はない ── アガーテは写真のように物事を記憶できる（〔第2巻〕第5、21、46章）── のだから。ウルリッヒがアガーテに語った、あるいは語っていない物語とはなんなのか？　のちに〔「あんなふうに終わってしまってはならないのだ」という〕教訓となるこの物語は千年王国と関係があり、いかにも軽く滑稽でさえある語り口で、「夜の会話」においてほのめかされた驚くべき愛のかたちとは異なった観点から上の引用に要約されている。しかし、この物語は出版されたテクストのどこにも見当たらないのだ。

第1巻第32章のいわゆる「忘れられていた、きわめて重要な少佐夫人恋愛事件」の存在がなければ、このことは多少なりとも標準的な物語上の体裁として受け入れられるのかもしれない。ちょうど第2巻第1章までアガーテが「忘れられていた」妹であるように、この出来事、あるいは物語[13)]も「忘れられていた」ものである。それが思い出されたのは、なりゆきでものにした色情狂の恋人ボナデーアとの別れをウルリッヒが初めて思い立ったときだ。彼女が服に袖を通し、彼が隣の部屋で「まともな人間が泡を吹く愚者へと変化した姿」[14)]から回復しつつあったとき、彼はモースブルッガーについて ── 性交にたいする狂わんばかりの恐怖心から殺人へと駆り立てられたモースブルッガーについて ── 考えに耽っていた。彼特有の連想がはたらいて、ウルリッヒはつづいて「神秘主義者」と似非神秘主義者について考えた。前者はマイスター・エックハルトのものだとされる引用に代表され、後者は若いころには賛美していたが今では忌み嫌っているメーテルリンク[15)]に代表される。「恥ずべき（schmählich）」ことに、自分は「メーテルリンクとは別の、本物の声にこれまでずっと帰らないでいた」と彼は思う。その声とは、神秘主義的直観という「神秘の言語」で語られたものだ。以下のくだりにあるようにウルリッヒはまだ33歳にもなっていないことからして、きわめて早い時期に神秘の言語について「自分で直接理解」したにちがいない。彼はその言語への近しさを感じている。その神秘的な「声音」を「兄妹のようなもの（Geschwisterlichkeit）」と言うほどに親しみを抱きながら（この時点ではまだ実の妹の存在を「忘れて」いたにもかかわらず）。「夜の会話」や小説中の数えきれないほどの場面で受動と能動が対照をなしているように、この柔らかく神秘的な声は「数学や科学の言語の高圧的な

（befehlshaberisch）調子」[16] と対比されている。その声は日々の営みの合間に点在している、互いになんの関連もなくめったに訪ねられることもない島々のようであるが、しかし失われた大陸（アトランティス、失われた楽園）に通じる道のようでもあるのだ。

「島」のイメージはウルリッヒに、抑圧された「きわめて重要な」記憶を衝撃とともに呼び覚ます ──「海への小旅行を、逃避行を」。そのとき彼は20歳だった。そしていま、彼はふいに

> はっきりとわかってしまったのだ。なんと奇妙で、滑稽なほど魅力的な体験が、そのたじろがせるような力でこれを最後に、似たような体験をすべて押しのけてせり出してきたことか。[17]〔＊5〕

これは一見すると単純だ。つまり、20歳のとき彼は「たじろがせるような」体験によって、神秘主義から「これを最後に」遠ざけられた。この見解が正しいことは、校正刷りの修正のあいだに書かれた、この章についてのムージルのメモからわかる。「本当のところ、これにたいする反動で、ウルリッヒは冷たい科学の道〔＊6〕を行くことになった」〔Mappe I/2/5〕。いわば彼は「冷たい科学の道」を、神秘主義との失敗に終わった恋愛事件の反動として選んだのだ。兄妹のような近しさを直接先取りした思考の光のなかで、あのとき彼は神秘の言語と共鳴した。しかし一生（！）その「本物の声」を避けつづけることは「恥ずべき」ことだとわかっているのに、「これを最後に」と断固として言っているのはなぜか。同じくわからないのは、いったいどうして「奇妙で、滑稽なほど魅力的な体験」がたじろがせるような効果をもっているのかということだ。ましてや、どうしてその体験が彼を同様の体験から永久に遠ざけてしまうのか（「たじろがせる（abschrecken）」とは「思いとどまらせる（deter）」よりも強い言葉だ）。神秘主義的体験が「滑稽なほど魅力的」だと述べられている理由も、さらに、この魅力的だがひるませるような体験が忘れられていたのなら、なぜこのときはウルリッヒが果敢に思い出した（wich er diesmal der Erinnerung nicht aus）と言われているのかもわからない。ほとんどそれを忘れようとしていただけであるかのように思える。実際のところ、1930年頃のメモではこのことについて長年「彼が避けてきた（ausgewichen ist）記憶」〔Mappe II/4/39〕だと書かれており、1930年に第1巻が出版されるほんの直前まで、章のタイトルは「（繰り返し）忘れられたきわめて重要な恋愛事件［……］」〔Mappe I/2/5〕だった。ここではムージル流のあいまいな乳白光が色濃くなっている。

抑圧された記憶、つまり（永久にかそうでないかは措くとして）彼を「似たような体験」から遠ざけた「滑稽なほど魅力的な」体験は、めったに訪ねられない島々のような神秘的な声の体験というよりも、むしろ恋愛事件の体験であるということが明らかになる。女性との失敗に終わった恋愛事件なら、同様の体験から人を遠ざけることもあるだろう ── しかしなぜ「神秘の言語」の（情感的ならぬ）本物の声から？　第2巻第12章でもみられたように、ここではまったく異なる二つのものが混同されているように思われる。この混同が現実になくなることはけっしてな

い。

この「奇妙な」体験は、「奇妙な結果に終わった恋情（eine sonderbar ausgegangene Leidenschaft）」でもあった。この物語を平然と読み流すような人は、人生と文学についての常識にもとづいて、物語もその結末も「奇妙な」ものであるという考えをきっぱりと否定するだろう。その物語は、野心に燃える少年と「30歳の大人の女性（femme de trente ans）」という典型的な物語をわずかに「滑稽に」したものである。その結末を要約すれば、どこにでも転がっている青春の体験にすぎない（私の関心は素材の扱われ方ではなく、作者によるその価値づけにある）。

物語は以下のとおりである。

20歳の騎兵少尉であったウルリッヒは、少佐夫人と恋に落ちた。彼女は年齢においても「家庭的に落ち着いていること（häuslichen Abgerührtheit）」（性的魅力の感じられないフレーズだ）からしても彼より「かなり年上」だった。彼は「彼女の生活状況に精通していた」が、そのことは実際、至福の熱狂とは両立しないものだとして斥けられねばならなかった。この年齢では「大いなる愛」というものはたんに観念にすぎず眩しいほどに中身のないものだ、と言われる。だがウルリッヒが性的に純朴ではないことについてはっきりと語られないことからも、12年たっても彼はこのことをけっして認めたくなかったと推測できる。その女性は彼と馬に乗ったり、多少困惑しながらも「天体、バクテリア、バルザックとニーチェ」についてのエロティックな雰囲気をまとった長広舌に耳を傾けたりするような、なんでも受け入れてくれる人だった。ついに口づけを交わしたとき彼らはすぐに途方に暮れてしまうが、待ちきれなくなった馬たちによってその状態から「解放」されて喜ぶ（「夜の会話」における馬の話を想起してもよいだろう）。

「少佐夫人と若すぎる少尉との愛は、その短い期間を通じて非現実的なままだった」という一文が、この文の終わりの部分のドイツ語（blieb auch in ihrem ganzen Ablauf kurz und unwirklich）の意味するところであるように思われる〔＊7〕。これ〔kurz und unwirklich〕が二語一想であれば、原文はわけのわからないものになる。しかしさらにわからないのは次の文にある二人の認識である。「なにかがおかしい。そしてたとえ衣服と道徳（Kleidung und Sitte）というあらゆる障害から解放されたとしても、彼女の方もこれからは抱擁のさいに体を押しつけたりはしないだろう」。たしかに、彼女は不義を犯す ── しかも男の子と言っていいような相手と ── ことについて良心の呵責を感じており、ウルリッヒはいまやできるだけ遠くへ、一刻も早く逃れたいとしか思っていない。しかし、情事に至らないそれぞれの理由を文字どおりにはとれない。障害になるものなどない ── 有刺鉄線も、女子修道院の壁も、ヘレースポントス〔＊8〕もない ── のだから、道徳以外のなにかが彼らを引き離しているという言葉は、矛盾を内包しておりナンセンスであるように思われる。ウルリッヒは性的不能あるいは同性愛者なのではないかと推測したところで、この「袋小路（impasse）」から抜け出せるわけではない。

若いウルリッヒが「袋小路」から抜け出した方法は退却であり、逃亡である。彼は長い休暇をとることにした。しかしこの物語はこれで終わりではない。これはむしろ始まりなのだ。内面的にも実際にも孤独なまま、文字どおり（地中海の）島〔＊9〕で、彼は普遍的で対象をもたない愛の神秘的な状態に身を任せる。「海、岩、空という仲間たちに囲まれて島の端に」横たわりながら、彼は「神秘的融即（participation mystique）」の持続的エクスタシーを体験する。そのなかでは「近い」や「遠い」という感覚が融解し、彼は「世界の心臓に」流れ着く。それは「愛の神秘主義にとらえられた敬虔な人びとが書き記した」まさにその状態であり、「そうした敬虔な人びとについて、若い騎兵少尉は当時いささかも知らなかった」（『テルレス』に似たような場面が見られる。生徒テルレスは「みんなのなかで自分は選ばれた者であると感じた。天国の幻影をみる聖人のように ── というのも、偉大な芸術家の直観について彼はなにも知らなかったのだ」[18]）。このすべてをウルリッヒは少佐夫人への手紙として書き残すが、彼が出したのは最後に書いたものだけだ。そこには、「愛に生きるという大いなる営みは、本当は所有［……］とはまったくなんの関係もないのだ」とある。所有への欲望は、要するに大食と同じ領域 ──「食欲的な」領域 ── から発生するものなのである。この愛の過程は完了する。ピアノを演奏している姿を皮肉にも空に浮かぶ「金ぴかの太陽」〔＊10〕のようだと描写されていたあの少佐夫人が、いまやウルリッヒに「啓示（illumination）」を与える「名前をもたないエネルギー中枢に、地下に埋められたダイナモに」、つまり「照明装置（Erleuchtungsanlage）」になる。きわめて重要な恋愛事件は「あらかじめ定められた形（die ihr vorherbestimmte Gestalt）」をとったのである。

この著しく強調された言葉が本来存在しない障害物と関係があろうとなかろうと、この物語の結末がどうなるかは見えているように思われる。太陽に比せられていた人物が「背後からの光」〔Mappe VII/8/12〕と化し、その光は、ムージルがかつてメモにそう記していたように、必ずや〈別の状態〉における現実をくまなく照らすにちがいない[19]。ウルリッヒは20歳にして、みずからの使命をうまく始動させているように思われる。その使命とは、「非食欲的な」愛によって〈別の状態〉を日常生活に融合させるというものであるが、しかしそれは結局うまくいかない。〈少佐夫人の物語〉は33歳〔正しくは32歳〕のとき忘却から救い出された。だがそれは、その物語が「たじろがせるような」力をもっていたという理由で、彼が ── いかに「恥ずべき」ことであれ ── その使命から目をそらしていたという事実を正当化するためなのだ。そして地下のダイナモ（あるいは他のなにか）によって与えられることになったはずの「啓示」こそ、まさにいまウルリッヒの手に入れていないものだということが明らかになる。この矛盾が解決できるとは到底思えない。

少佐夫人の出来事（the affair of the Major’s wife）あるいは少佐夫人との情事（the affair with the Major’s wife）は、第32章以降もしばしばほのめかされている。それは、際限なく議論されているウルリッヒの存在の両極性、つまり能動的と受動的、肉欲的と禁欲的、「数学者」と「神秘家」という文脈においてである。こうした両極性はしかし、曖昧模糊としている。

この小説においてきわめて重要な第１巻第62章では、この両極性をめぐる一節が「愛につい

て書き記すためには、愛する者はそこから去らねばならない」という示唆的な言葉のあとにつづく。「ウルリッヒはときおり無限の感動に襲われてなにもできなくなるが、それとは逆に限界と形式を求める活動の欲求をももっていた」[20]。ここにムージルは簡潔なコメントをつけている――「少佐夫人体験（Erlebnis Fr. Mjr.）」〔Mappe I/2/14〕、と。この場面は1913年から14年にかけての真冬の時期で、ウルリッヒの一年間の「人生からの休暇」はほぼ半分が終わってしまっていた。ウルリッヒは「絶望」し、「人生で最悪の苦境に立たされており」、「なにもしてこなかった自分を嫌悪」する。しかし彼は「まだなにかが自分のために残されている」と感じてもいる[21]。

第1巻第68章ではこの物語はまた別の意味づけをされている。ウルリッヒはそこで美しいディオティーマに言い寄る機会を手にしている。しかし「肉体の高尚な美［……］は彼にとっては生まれてこの方（Zeit seines Lebens）無縁のものであった。そのような傾向を彼のなかできわめて長いあいだ（für die längste Zeit）閉ざしてしまった、少佐夫人のあの夢のことを度外視すればだが」。「彼の女性関係はすべてそれ以来ゆがんだものになった（waren seither unrecht gewesen）」[22]。少佐夫人と関係をもたなかったために、結局のところ彼はうまく啓示への道を歩みだせなかったにとどまらず（対照的に、彼はその反動で「冷たい科学の道」をとった）[23]、性生活もかき乱されたようだ。逆説的ではあるが、もし二人の愛人レオーナとボナデーアとの関係を基準にするなら、女性にたいする彼の態度は最も憂鬱な意味で「食欲的」であるように思われる。いったいなぜこうしたことが「非現実的」で「魅力的」な〈少佐夫人恋愛事件〉によってひき起こされたのかという疑問への答えはここにもなさそうである。

第113章ではウルリッヒは遠回しにその恋愛事件のことを、「恋に恋した」出来事、自分の「変容した状態（veränderter Zustand）」に恋したのであって、「その状態の一部となっている女性に恋したわけではない」出来事だと語っている。つづくところで、「非食欲的な」愛を弁護しているのはウルリッヒというよりむしろ滑稽な役回りのハンス・ゼップ[24]であるが、ウルリッヒもその主張に肩入れしていないわけではない。

第116章のじつに悲観的な内省においては、恋愛事件の神秘主義的な側面がもう一度強調されている。

> 疑いなく、あの残念ながら幾分滑稽な少佐夫人恋愛事件は、彼の存在の柔らかな影の部分で生まれた、完全な発展のための唯一の試みであり、同時にもはや終わることのない回帰のはじまりを示していた。

我々はまだ、「幾分滑稽な」（繰り返しになるが、少佐夫人「との（with）」）情事が、魂の発展におけるこの運命的な逆戻りをどのように引き起こすのかわかってはいない。わかっているのは、（第32章で言われているように）少佐夫人体験が同様の体験のうち最初で最後のものであるということと、「時がたつにつれ、ランプの油のように、［……］彼の人生から、それがなくては生きていけないという感情が尽きてしまった」（「照明装置」が機能しなくなった）ということだけで

ある。驚くべきことに、だが第2巻第22章では、「千年王国へ参入しよう」とするウルリッヒの姿勢と、「考えうるかぎりでは」〈別の状態〉は存在しているという彼の「確信」を我々は告げられる。「それは〈少佐夫人恋愛事件〉としてはじまり、その後の経験は大いなるものではなかったものの、しかしいつも同じものであった。[……] 善意と賛美という、なにかを大切にしようとする気持ち」[25]。この章でも（すでに言及した）「近い」と「遠い」の融解、〈遥かな愛〉、そして山岳地帯での秋が出てくる。

「少佐夫人」のエピソードは反復と矛盾とで成り立っている。反復が起こるのは、神秘主義的な側面が強調される箇所において最も顕著である。「思索（Nachdenken）」と題された1934年の草稿では、「彼が成人した最初の（allerersten）年の、島での」[26]〔Mappe II/1/270〕記憶は、第1巻第32章でのエクスタシーの描写の要約に行きつく。ムージルはさらにこう付け加えている。「そのあと彼は、小さな変更を加えつつそれをモデルとして用いることがしばしばあった」〔Mappe II/1/270〕。これがたとえウルリッヒの話であったとしても、ムージルは明らかに作者としての自分自身について語っている。矛盾についてはひょっとすると、ウルリッヒのあり方の両極性と彼の気分に由来するものもあるかもしれないが、複合体としての小説全体においては本来的に矛盾するものも含まれている。恋愛事件のたじろがせるような位相は ── あるときは霊的なものに、あるときはエロティックなものに向けられるかと思えば、時には消失することもある ── 説明されないままである。我々が知っているのは、昔なにかがうまくいかなかったことと、ふたたび同じ失敗を繰り返さないようにすることにウルリッヒの人生はかかっているということだけだ。

ムージルはどれだけ注意深く読んでも十分すぎることはない。彼の言葉は綿密かつ細心の注意を払って精査する必要がある。彼の反復、異文、矛盾はきわめて精密に検討されねばならない。無数の錯綜した関連は、最終稿へとつながっていく各々の草稿内部での記述に照らしあわせて吟味するためにいったんまとめる必要がある。

〈少佐夫人恋愛事件〉の謎にたいする答えは、主として1925年某日から1928年10月のあいだに書かれた三つの手稿にある。うち二つは恋愛事件のヴァリアントを含んでいる〔＊13〕。この二つのうち、より早くに書かれた方は小説の成立史における「双子の妹（Zwillingsschwester）」の段階のものであり、S_3+n-1〔＊14〕という記号がついている。つまり、これは（断片的な）「S（= Sister）」草稿〔＊15〕の三つ目の部分に含まれており、一連の章のなかでの位置はまだ決まっていない。そこで主人公アンダースは、一人で子どもじみた熱狂とエクスタシーについて思い出しながら、ほぼ正確に『特性のない男』第1巻第32章と同じ言葉を述べていた。その後に書かれたもうひとつの手稿は、この稿に直接依拠しているか、あるいは（現存しない）中間稿 S_3+9 ── 二つ折りにした二面付けの裏表の紙二枚のうち二枚目にこの記号が付されている〔＊16〕── に依拠しているが、このテクスト全体はS手稿以後の方法によって分類され、9として（カバーでは10に修正されたが、見出しでは修正されていない）第2巻第3章群に含まれている[27]。どちらの分類でも、プロットの第三段階〔＊18〕は『特性のない男』第2巻第13章

以降と対応している。9 A-Ag〔＊19〕［アンダース／アガーテ］というこの草稿は、あの物語を完成稿とは異なった文脈に置き、そしてそこに別の重要な事柄を付け加えている。執筆メモと物語の最初の約 2 ページから、アガーテの夫ハーガウアー ── アガーテが捨てた男であり、彼女は彼の不利になるように父の遺言状を偽造した（『特性のない男』第 2 巻第 15 章を参照）── が彼女の罪を告発したことと、アンダースとアガーテが離婚手続きのことで訪ねていた弁護士のもとからちょうど戻ってきたところだということが明らかになる。これらのページは『特性のない男』第 2 巻第 29 章と（比較的少ないが）第 30 章の素材を含んでいる。しかしこの二つの章において、ハーガウアーはなんの疑念も表明していなければウルリッヒたちが弁護士を雇ったという話もない。その手稿は常になく修正がほどこされていない。以下に、元のつづりと句読点、および文体上の問題以上の意味をもつであろう（執筆時の）少量の削除箇所[28] を復元してみよう。

彼らは開け放した窓のそばに座っていた。正午の鐘が鳴るのが聞こえた。層をなす雲のように彼らは屋根の上空をただよい、自分たちはそのままに影だけを道路へと投げかけた。

町で鐘が鳴るのを初めて聞いたわ ── アガーテは言い、やさしく微笑んだ。

聞いてくれ、アガーテ ── アンダースが言った。話しながら彼ははじけるように立ち上がり気ぜわしくあちこち歩き回った。彼は彼女の手をとって、ふたたび彼女の横に腰を下ろした。── 僕はまだ 20 歳になっていなかったが、そのとき回心としか言いようのないことを体験したんだ。僕はそのときまだ士官で、たしかに神学者の能力はほとんど備わっていなかった。僕はまだ一度も恋をしたことがなかったが、もはや心を拉し去るような情熱、すなわち「大いなる愛」を体験しないわけにはいかないと確信していた。そうならねばならないときには、自分に向けられた光線をスクリーンのようにはね返して、まるで自身から光線が発しているかのような女性がつねに見出されるのだ。彼女は僕より年上で、僕の所属する騎兵中隊の指揮官の妻だった。僕は休暇をとっていて、偶然が僕らを兵営の外の〈同じ…〉湯治場で引き合わせた。彼女は僕が好きだったが、見るからに若い／ひげのない坊やと恋の冒険をすることはためらわれた。というのも、彼女はきちんとした〈心やさしい〉女性で、あとで僕に言ったように、僕と関係をもつことは倒錯したことだと思われたからだ。でも僕は、普通ではない話、彼女の世界には存在しない哲学的で情熱的な話をして彼女を困惑させた。そしてそうせずにはいられなかったので、僕は散歩の途中彼女の手を握ろうとした。運命の望むがまま、彼女は一瞬その手を僕の手に、気を失ったようにゆだねた。次の瞬間、炎が腕から膝まで燃え上がり、僕たち二人を愛の稲妻が打ち倒したので、僕らはあやうく道の斜面に倒れこむところだった。斜面の芝の上に座りなおして、僕らははげしく抱きあった。

僕たちは晩に別れた。夜は眠れなかった。心のなかで嵐が吹き荒れた夜、「途方もない」決心で頭がいっぱいだった。そして次の日の朝、僕は去った。僕は愛だけを連れて、その原因でありかつ対象であるものから逃げたのだ。すべては手紙に書くよ、という言葉だけをあとに残して。

彼女があとで話してくれたことだが、目覚めさせられたものの満たされることのない情欲に襲

われて、僕の上司の妻は、喉の渇きのように渇いた体をかかえてベッドのなかで身悶えしていた。同時に、次の日には〈最後の〉ダムを決壊させるはずの情熱の奔流が洪水のように突然あふれ出ることを思うと、彼女は不安になった。彼女は一晩中自分を責めたが、朝になって僕からの急な別れの手紙が届けられ、涙に暮れながらも安堵の息をついた。僕はなにもかも置いてきたから休暇を適当な時期で切り上げるのも忘れていて、親切な彼女が僕のために夫にこっそり口添えしてくれていなかったなら、逃亡の咎であやうく面倒なことになるところだった。

僕はこの夜彼女からますます遠くへ運び去られた。経験が少ないにもかかわらず、僕にはわかっていたのだ。彼女はただのきっかけにすぎず、僕の突然の体験の中身ではないということが。僕はごくわずかの荷物をもって短い距離を鉄道でゆき、一歩一歩がすでに新たな土地を踏みしめていることを感じながら、山岳地帯の小さな寂れた巡礼地へ向かって歩いていった。そこはこの季節には人気（ひとけ）がなく、ほとんど人が住んでいなかった。

僕がそこでしたことは ── これを誰かに説明しなければいけないとしたら ── 純粋な無であろう。季節は初秋か晩夏で、空には雲ひとつなく、大気には至福の苦悩、目を閉じてしまいそうなあの甘い眠りの暖かさに満ちた山岳地帯の太陽。僕は歩いていった記憶がない。僕は宿の前に歩みでて、いま時分空中をただようたくさんのクモの糸（Mariengarn）の一本になったように引き上げられた。僕はどこかへ ── 近くの高原の草地のひとつがいちばんよかった ── 運ばれるままになり、このように我を忘れたまま一日に何度か場所を変えたり、もってきた二、三冊の本をすこし読んだりした。僕はこの読書がかなり風変わりなものであったことを覚えている。本に書かれた考えがだれのものなのか、その境界はほぼ完全に解消していたと思う。人物が本のなかに現れてきても僕は彼らのことをイメージできなかったし、普段やっているようには、本という半透明な壁の後ろにいる作者のことも本の前にいる自分のことも見えなかったのだ。〈でも、それはいわば魂の元素であったのだが〉それは錆びついた殻人間（rostige Hüllen）で、〈思考を離れたものであり、岸辺は…〉やさしさと考えの海の底〈もはやその殻人間はやさしさと考えの海を腑分けせず、海が殻人間どうしを結びあわせた。〉にぽつんといた。僕はその海の一部だった。

本当は ── アンダースは話を中断した ── 僕は何年ものあいだこの体験を正確に思い出そうとしたけれど、無駄だった。その内容をふたたび蘇らせることはできなかったんだ、〈その体験が〉〈僕をなにも…〉僕は〈その体験ほど心奪われるものは…〉それからというもの、ずっとそのときのことを考えてきたのだが。僕は世界の心臓に入りこんでいたんだ ── 彼は微笑みながら言った［。］

そして、彼はゆっくりと続けた。君と出会ってからというもの、僕はそれがなんだったか再びわかりはじめている。それは甘やかに気を失うような燃焼だった。僕は火にくべられた薪のように世界で燃え、世界は僕によって燃え上がった。本に起こったことがすべての事物に起こった。僕が見た木は、木であるために必要なものをそれ自体としてもっているわけではなく、みずからを与えそれと引き換えに視力を僕から受けとったんだ。すべては名状しがたいほど流動的な精神の液体のようであり、そのなかでは固い沈殿物はやさしい波からまだ分かれてはいなかった。

〈すべては循環し、収束することはなかった〉力強い動きが絶えず新たに生まれでる円環となって広がったが、それが向かう先は定かではなかった。すべては惹起であったが、確固たるものはなにもなかった。変わらず真（wahr）であるものはなく、すべては真実らしいもの（wahrscheinlich）にすぎなかった。これまでに獲得した知識はすべて死んだように消え去り、より高い感覚を与えられたように、いつもの厳密さは避けられる。それにもかかわらず、僕をいま恍惚とさせ、意志と途方もない意味とにあふれているものは次の瞬間には沈黙してしまい、ただ物言わぬ日常の相貌を呈するだけなのだ。

奇妙なものだ、まったく別の法則にしたがったある生について、このように確信しているというのは！　この忘我状態にあって、あのひとを所有するという考えほど〈僕にとって、当時〉遠くにある考えはなかった。それは吸いこんだ浄福な空気を所有するということくらいほとんどありえないことだった。もし僕があの瞬間に、彼女がだれかほかの男に身を捧げていると知ったならば、その男のふるまいはこの贈り物に値する器なのかと問うだけだっただろう。というのも、たとえなにが起こったとしても、それはすべて永遠に変化しつづける空の雲のように流れていったからだが、その変化のなかではなにも変化しないのだ。青い深海も、真珠の輝きをもつ魚の音のないきらめきも。

一匹の獣が森のなかから出てきたが、なにかが変化するということもなく、ただ脈が打つ以上のことは起こらなかった。静かに胸壁を打つ、無限に続く生命の流れが生みだすほかのすべての脈動とまったく同じように――そんなことが起こりえたのだ。僕から遥かな〔＊20〕恋人までの距離は足元の草の茎までの距離より遠くはなかったし、夜の星までの距離より近くもなかった。思うに、原罪はなかった。邪悪なことはそもそも考えられなかった。というのも、これは愛の世界であり、そのなかでは〈人は〉炎を燃やしているものしか見えなくなるからだ。

僕はその世界を知っているのだろうか、アガーテ、そしてそれを正確に書き記しただろうか？　彼はやさしく尋ねた。

彼らにつきそっていた鐘の音楽はとっくに止んでいた。アガーテは彼の手を握って、話を続けるよう頼んだ。

それ〔＊21〕が終わったかって？　うん、ある日それはまさに過ぎ去ってしまったんだ。夜のうちに割れた鏡のように、朝起きたら破片となっていた。神に相対した天使たちの状態ってわけだ。天使たちには必要のないことだが、このような状態で人間にどうやってたとえば歯を磨け〈そして同様のことを？〉、あるいは財産を管理しろというのか？　もし僕が神を信じていたらひょっとすると聖人になったかもしれないが、しかしある日気がつくと、そこにあるのは鬱屈した、中身のない、息の詰まるような物思いだけだった。僕はそれ以来、神は世界を動かすために悪事、貧困、暴力、利己心、卑劣、金を必要としているのだと確信している。僕はふたたび世間に、つまり僕の連隊に戻った。あのひとと再会したとき僕の心は冷たくなり、数週間後彼女をきわめて卑俗なやり方で僕の恋人にした。

アガーテは身震いした。

僕はあの日、魂を失ってしまったのだと思っている ── アンダースは真剣にそう言った。その後僕に起こったことは、なんであれ僕とは関係なく傍らを通り過ぎていった。ただ表面を通り過ぎるだけなのだ。僕は幸福ではなく、ある目的にたどりつく可能性を見出すこともない〈。僕はいまも終わりを知らない。僕は人間が好きなのだが…〉。そして愛の力よりも卑しいものの力のほうが創造的であるということに繰り返し気づいてしまっている。

彼の妹は悲しげな顔で不機嫌そうに立ち上がった。彼女は夕食をもってこさせた。召使いが部屋を後にしたとき、アンダースは言った。わかるね、僕たちが愛という大いなる状態について話しているあいだ、そのなかで15分ごとに怒りがふくれあがってきたことが。怒りが今日はけ口をもっているということを僕たちが忘れていたからだ。僕はその怒りをどうにかして紛らわせようとしているが、どうやって僕は〈それ〉その事実を乗り越えればいいのか？　〈同時に〉僕はその事実をさまざまに変奏することができる。僕の魂は海岸に横たわっていて、満潮がやってくる。僕はどうやって魂をすばやく遠くへやるのか？　僕は、やあ兄弟といって雄牛に話しかけるが、雄牛は僕を角に引っかけたいという。僕の魂はどうするのだろう？

── もしそうなら ── アガーテはぶっきらぼうに答えた ── それならどうして私たちはハーガウアーにすこし譲歩しないのかしら⁉　この件を片づけましょうよ！

── 遅すぎるからだ！ ── アンダースは言った ── もはや僕たちにはできない。彼なら僕らの弱腰をそのままにしてはおかないだろう。〈彼がこう付け加えたとき〉僕たちは〈この道を〉いまや進みつづけなければならないんだ！ ──〈彼がまさにこの強迫観念ゆえにこの道をとったということに、だれだって気づくことができただろう〉この言葉と同時になにかが彼のなかでひらめいた。彼は幸運だった。彼の理性がこの危険な企てを信じていないからこそ、彼はもはや引き返すことができないのだから。

しかしアガーテは不安のあまり夜のとばりのなかで泣いていた。

この手稿は「素材」（ムージルは自分の昔のテクストをそう呼んだ）のひとつであり、「第2巻」と書かれたファイルのなかにある。そのファイルには『特性のない男』第2巻第41章から第45章までの推敲された草稿が含まれている。比べてみると、この草稿の一部は実際これらの章に利用されたことがわかる。ムージルは、自分がかつて書き留めたエピソードや細部の表現を放棄したがらないのが常だったが、古いテクストをそのまま使うことも、エピソードどうしの順番をそのままにしておくこともしなかった。その推敲の過程とは、古い物語の織物を解体して、部分部分 ── ばらばらの糸であることが多い ── を新しい絨毯へとふたたび作りあげることだった。1928年11月14日になって、〈少佐夫人の物語〉はひとまず『特性のない男』第2巻第15章の前身の一部を形づくることになった。それは、どのようにアガーテと自分は一緒に生きていくつもりかについて彼が話した箇所である。つまり「千年王国に参入すること」についての最終稿の最後の一節は、「世界の心臓に入りこんでいた」というアンダースの体験から発展したヴァリアントなのだ。しかしムージルはすでに11月1日に9 A-Agの扱いにくさに直面し、11月14

日までには、それを〔第2巻の〕「30/32章」で使うことはないだろうとはもはや思わなくなっていた〔＊22〕。1929年1月5日にはじまった『特性のない男』第1巻の「清書」のあいだに、彼は〈少佐夫人の物語〉を第2巻のその（まだ決まっていない）場所から切りとった。そしていま一度主人公の心のなかのフラッシュバックとして、小説の初め近く、第33章（まだ第32章ではない）に移した。テクスト中の残された表現は、その後『特性のない男』第1巻第72章、第103章、第2巻第10章、第11章、第12章、第15章、第22章、第29章、第30章、第31章、第38章に組み入れられた[29]。『特性のない男』第2巻における、S_3のハーガウアー、偽造、離婚と対応する部分では、〔アガーテによって〕短い懺悔がなされている（第29章、第30章）。この町にあると初めてアガーテが気づいた鐘は第31章に出てくる。そこでまた彼女は初めて慈善家（リンドナー教授）と出会うが、彼のことは9 A-Agで（最初のページでマインガスト教授として）すでに知っていた。9 A-Agではそれは（プロット案によれば）1913年の6月か7月のことである。『特性のない男』第2巻第33章以降は夏で、1914年の5月と6月である[30]。プロットの内容と展開の両方の点において、改稿のあいだに小説の規模は驚くほど変化した。素材がどこに「収められる（untergebracht）」ことになるかという問題は、どのように物語るかよりもつねに優先権をもっていた。

〈少佐夫人の物語〉ですら、『特性のない男』においては「非－物語（non-story）」である。恋愛事件として、その短い期間を通じてその体験はずっと「非現実的」だった。ウルリッヒの「世界の心臓に入りこんでいた」体験がどのようにして終わったのか、読者には語られない。最後の文からは、夢の恋人への最後の手紙は彼の熱狂の頂点と一致しており、「その後すぐそれは終わり、突然の中断を迎えた（auf den bald deren Ende und plötzlicher Abbruch folgte）」ということしかわからない。この同語反復的な「終わり」と「中断（abbrechen）」は、もしかすると9 A-Agにおける〈別の状態〉の「破壊（zerbrechen）」（「夜のうちに割れた鏡のように」）を想起させるかもしれない。もしそうならばその理解を読者に求めるのは酷であろう。しかし、あとでわかるように、読者はここで闇のなかに二重に置き去りにされているのである。

しかし「非－物語」の背後には物語があり、その手がかりは9 A-Agと『特性のない男』第1巻第32章との相違点 ── それがどんなに些細なものに思われようと ── にこそあるのだ。アンダースは「まだ20歳になっていなかった」ときにあの体験をしているが、ウルリッヒは20歳だ。アンダースは湯治場での休暇中に偶然彼の部隊長の妻と会うが、ウルリッヒは小隊での服務中である。9 A-Agでは、アンダースと関係をもつことにたいする彼女の唯一のためらいは、「ひげのない坊や」との情事は「倒錯した」ことだということにあり、ウルリッヒの場合と同様に姦通は障害にはならない。彼らは馬に乗らず、並んで歩いた。最初の（そして最後の）抱擁から逃れたいという彼らの願いについてはなにも書かれていない。眠れない夜のあいだ彼女は、次の日「情熱の奔流」が「ダムを決壊させて」しまうだろうと予期しているが、『特性のない男』では、具体的に名状しがたい障害があることを二人ともわかっている。ウルリッヒは少ししてから休暇をとったのにたいし、すでに休暇中のアンダースはすぐに逃走している。彼の休暇はほとんど終

わっていたか、彼がいなかったのは二、三日以上だったか、あるいはその両方だ。というのも、彼の逃走が咎められずに済んでいるのは、ただ夫人が夫に「こっそり」口添えをしたからだ。

ウルリッヒとはちがい、アンダースが旅するのは短い距離である。ウルリッヒが海に行く一方でアンダースは山に行くが、〈別の状態〉の体験は象徴的な海として現れる（フロイトの「大洋感情」）。ウルリッヒはこの体験を忘れようとする、あるいは忘れたふりをする（彼はけっしてそれを忘れたことがなかった、と言われる場合もあるが）。アンダースは「何年ものあいだ」それを「正確に」思い出そうと「したけれど、無駄だった」。ウルリッヒは島にきてしばらくしてから手紙を書くことをあきらめ、自然に身をゆだねる。アンダースの〈別の状態〉はまず読書と結びつけられ、読む本がなくなったので彼は退屈になるのではないかと推測される（この相違は年をとったムージルと若い頃のムージルの習慣の違いに対応している）。うまくいかなかったことすべての結果として、ウルリッヒは「冷たい科学の道を行くことになった」が、繰り返し「科学」を見限ると口にし、しばらくして実際にそうする。アンダースは、醒めた気持ちで「神は世界を動かすために悪事［……］を必要としている」と確信しながら、「目的にたどりつく［……］こともない」道を進みつづけねばならない。彼は「世間に、つまり僕の連隊に」戻ってきたときにこのことを確信し、彼の愛した人がもはや魅力的ではないことに気づき、それにもかかわらず彼女を、「きわめて粗野な」、「きわめて凡庸な」〔＊23〕、ないしは「きわめて卑俗なやり方で」恋人にした。

それをしたことによって「魂を失ってしまった」ということを彼が伝える以前に、すでにアガーテは震えている。なぜか？　草稿「双子の妹」と『特性のない男』、どちらにおいてもアガーテは他の事柄同様に性的にも道徳心がない。部隊長の妻は「倒錯」についての良心の呵責を克服した。すれた読者は「きわめて卑俗なやり方で」尋ねるだろう ── なにをそんなに騒いでいるのか？　おそらく、それは山から下りることだからだ。つまり、人気（ひとけ）のない山岳地帯にある寂れた巡礼地から。太陽に照らされた流れ糸、あのクモの糸（Mariengarn）、空中にただよう聖母マリアの紡ぎ糸 ── それは純粋な少女や母親のしるしであり、それとともにアンダースは草地のあたりをふわふわと漂っていたのだ。彼の「回心」は失敗し、それゆえ彼はみずから自分を呪う。彼はいまやアガーテのなかに〈別の状態〉、すなわち「回心」の状態を発見したにもかかわらず、なにかを正しい状態に引き戻すには「遅すぎる」と言ってきかない（見当ちがいに思えるが、みじめなハーガウアーとの争い全体を、「すこし」譲歩することによって帳消しにしようとアガーテが提案するとき）。彼の魂は海岸に横たわり、潮が満ちつつある。どうやって彼はすばやく自分の魂をそこから動かそうとするのか？　アンダースは〈別の状態〉の海につかりたいとはけっして思わず、近づいてくる潮を、いまにも彼を角に引っかけようとしている雄牛だと思って怖がっている ── こうも言えるだろう、それはジレンマという角なのだ、と[31)]。

〈少佐夫人恋愛事件〉の二つのヴァリアントが1928年以降も作者の頭のなかに存在していたということから、解きがたい緊張が浮かびあがってくる。絨毯の図柄が完全には見えていないところでは、ある糸〔自伝的事実にもとづくエピソードを構成している要素のひとつのこと〕がき

つく引っ張られることがある。エキセントリックな図柄だけをじっと見ようとする人もいるかもしれないが、その絨毯にたいする興味が十分にある人は、表面下に消えていった糸の行方を好奇心に駆られて追いかけようとするだろう。表面下にあるものとはもちろん、この、作家のなかでも最も自伝的な作家ムージルの人生である。

[付記]

ここに訳出したのは Eithne Wilkins の論文 “Musil’s ‘Affair of the Major’s Wife’: With an Unpublished Text” である。掲載されたのは “The Modern Language Review”, Vol. 63, No. 1. January 1968 ── 50 年前のいささか古い論文だが、その翻訳を思い立ったのには理由がある。この論文で初めて紹介された、ムージルの『特性のない男』（1930/32）にかかわる未発表の草稿 „9. A-Ag.“ が、その後のアードルフ・フリゼー編集の „Gesammelte Werke“ Bd. 1（1978）にも、現在刊行中のヴァルター・ファンタ編集の „Gesamtausgabe“ Bd. 1–6（2016–2018）にも採録されておらず、現在にいたるまでこの論文でしか読めないからである。正確にいうと、W・ファンタ、K・アマン、C・コリーノ編集の „Klagenfurter Ausgabe“（2009）で ── 後述の „s_3+9“ として ── 読めないわけではないのだが、このクラーゲンフルト版はデジタル版でしか刊行されておらず、しかもムージルの遺稿に関するある程度の文献学的知識がないと判読にかなりの困難を伴う。つまり、普通に読めるテクストとしては実質的に、本論文中に収められた „9. A-Ag.“ しかないのである。そして、この „9. A-Ag.“ こそは、未完に終わった長大な小説『特性のない男』における「忘れられた」物語として主人公ウルリッヒに影響を及ぼしつづける〈少佐夫人の物語〉の、1920 年代に書かれた草稿であった。

カール・コリーノの浩瀚な伝記 „Robert Musil – Eine Biographie“（2003）においても、『特性のない男』第 1 巻第 32 章〈少佐夫人の物語〉の背景をなす伝記上の事実を示唆するものとして、この „9. A-Ag.“ から多くの引用がなされている。私たちがそのことに気づいたのは、コリーノの書の早坂七緒らによる翻訳『ムージル伝記』（2009–2015）において、この論文が [ÖNB][AN][C] などムージルの草稿ないし遺稿を示す記号とならんで [WA] の記号を付されて「略号一覧」に記載されていたからであるが、その一方で、ほぼ同時期に書かれたヴァルター・ファンタの詳細な『特性のない男』成立史研究の書 „Die Entstehungsgeschichte des „Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil“（2000）にはウィルキンズ論文への言及が一切ない。これはいったいどういうことであろうか。

その謎を解くためには、本論文中でウィルキンズによって紹介されている „9. A-Ag.“ 草稿に目を向けねばならない。ウィルキンズはこのテクストの出典を明記していないのみならず、〈少佐夫人恋愛事件〉をモティーフとする草稿相互間の関係について、一読して理解できない説明をしている（336 頁）。しかし私たちの調査で、この „9. A-Ag.“ とまったく同じ草稿が „s_3+9“（オーストリア国立図書館所蔵の „Mappe VII/9/122–129“〔＊25〕に当たる部分）という名でクラーゲンフルト版に収録されていることが分かった。この謎めいた草稿の 1 頁目には „9.“ という数字が記されているだけなのだが、ウィルキンズはこれを『特性のない男』のために書かれた „A-Ag.“ 草稿群の一部だと解釈し、„9. A-Ag.“ と呼んだ。しかし、ムージルの遺稿を CD-ROM に収めた „Der literarische Nachlaß“ (1992) において、これは『特性のない男』の前段階のひとつである「双子の妹」のために書かれた „s“ 草稿群の一部をなすものと見なされるようになった。以後、最新のクラーゲンフルト版にいたるまで、この草稿は „s_3+9“ と呼ばれている。つまり本論文でいう „9. A-Ag.“ とは、現在いわれている „s_3+9“ のことなのだ。しかし、私たちがこの問題について W・ファンタ氏と何度かメールでやりとりをしたところ、驚くべき事実が判明した。この „9.“ という数字を付された草稿が „A-Ag.“ 草稿群に属するのか、それとも „s“ 草稿群に属するのか、確実なことはわからな

いというのである。ファンタ氏に答えを聞くことはかなわなかったものの、しかし私たちの調査で明らかになったのは、この草稿はやはり „s“ 草稿群に属する „s_3+9“ と呼ぶべきものであるということである。これにかんする文献学的考証は、解題であらためて取り上げる。

「どうしてとっくに乗り越えられた論文をいまさら訳すのか？」と、ファンタ氏は当初メールで言っていた。ウィルキンズ論文が文献学的に乗り越えられたものと見なされることによって、この「忘れられた」論文で紹介された „9. A-Ag.“（＝ „s_3+9“）もまた、「忘れられた」草稿となってしまったのであろう。おなじく少佐夫人体験をあつかった „s_3+n-1“ 草稿はフリゼー編 „Gesammelte Werke“ にもファンタ編 „Gesamtausgabe“ にも載っている一方で、„s_3+9“ はこれらの全集のどこにも見当たらない。しかしこの „s_3+9“ には、„s_3+n-1“ にも『特性のない男』第１巻第32章にも書かれていない内容、つまり主人公の若い頃の神秘体験がどのように終わったかについての詳細な記述が含まれているため、〈少佐夫人恋愛事件〉について考察するうえでこの草稿はけっして軽んじられてはならないものである。最新版の全集にも採録されずにこの草稿がますます忘れ去られてゆくいま、そこで描かれた別の〈少佐夫人恋愛事件〉の形がもつ意義をふたたび考えてみるのも、意味のないことではないだろう。

タイトルの〈少佐夫人恋愛事件〉という語であるが、これは英語の “Affair of the Major’s Wife” の訳である。ウィルキンズはドイツ語の „Geschichte mit …“ を英語でどのように表現するか大いに難儀していたようである（原註13を参照）。彼女は最終的に「affair of（出来事・事件）」という語を選択したが、ドイツ語の „mit“ のもつニュアンスを考えると「affair with（情事）」も捨てがたいと述べている。これを受けて私たちは、その両者のニュアンスを汲んだ「恋愛事件」という訳語を選択した。

ウィルキンズが地の文で引用した箇所の翻訳に際しては、原典が確定できた箇所は原則として原典に基づいて訳し、必ずしもウィルキンズの英訳にしたがわなかった（凡例３を参照）。ただし、ウィルキンズの論述内容と密接にかかわってくる引用の場合は、その限りではない。作品および草稿の成立年等、ウィルキンズの記述に誤りがある場合は、訳者の知りえた範囲で訳註を付して修正した。

今回は、本論文の前半部に当たるところを訳出した。後半部は次号、解題とあわせて掲載する予定である。

［凡例］

1　原註は1)、2）…という形で示し、付記の後にまとめた。

2　訳註は〔＊1〕、〔＊2〕…という形で示し、原註の後にまとめた。ただし本文の補足説明として必要とした場合は、〔〕でくくり、本文中に組み込んだ。

3　原典からの翻訳に際しては、クラーゲンフルト版全集（Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann u. Karl Corino. Klagenfurt 2009. Update 2015）に依拠し、ここからの引用は〔Mappe VII/9/122〕、〔Heft 36/49〕の形式で本文中に示した。„Mappe“ および „Heft“ 以下の数字は〔Mappengruppe / Mappe / Pagina〕、〔Heft / Pagina〕の順番に付し、上記の例では〔ファイル群 VII/ ファイル番号 9/122 ページ〕、〔ノート番号 36/49 ページ〕を意味する。

［原註］

1）主として以下を参照した。MOE = *Der Mann ohne Eigenschaften*. Gesammelte Werke herausgegeben von Adolf Frisé, Band I (Hamburg 1952); TB = *Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden*. Gesammelte Werke herausgegeben von Adolf Frisé, Band II (Hamburg 1955); PD = *Prosa, Dramen, Späte Briefe*.

Gesammelte Werke herausgegeben von Adolf Frisé〔, Band III〕(Hamburg 1957). これはノート群から省かれていた素材のいくつかを含んでいる〔＊1〕。*Studien* = Wilhelm Bausinger: *Studien zu einer historischkritischen Ausgabe von Robert Musils Roman 'Der Mann ohne Eigenschaften'* (Reinbek bei Hamburg 1964). 引用はすべて初版から（たとえば *Der Mann ohne Eigenschaften*, Band I,1930; Band II, 1933〔正しくは 1932〕)、あるいは、相続人の許可を得て手稿からおこなっている。英語での引用は、必ずしも翻訳にしたがっていない（*The Man Without Qualities,* London, 1953, 1954, 1960, 初版よりの翻訳、*Young Törless*, London, 1955, 1911 年の第二版（1906 年の初版の句読点を修正したもの）よりの翻訳)。『特性のない男』〔翻訳版を含む〕の三つの版すべてで本文とページ数両方が異なっているため、出典の指示は章番号だけにとどめ、ページ数は記していない。

2）1925 年のプロット案から判断するに、この小説はまだほとんど動きはじめていない〔＊2〕。1940 年の章立ての計画は第 69 章まで続いているが、未完となった第 2 巻第 52 章までのプロットしか考えられていない〔Mappe V/2/67, ただしクラーゲンフルト版では 1939 年 7 月－1939 年 10 月〕。この小説の成立史については以下を参照のこと。Ernst Kaiser: Die Entstehungsgeschichte von Robert Musils Roman *Der Mann ohne Eigenschaften.* In: *Studi Germanici* (nuova serie) 4 (1966), S. 107–118; Eithne Wilkins, 'The Musil Manuscripts and a Project for a Musil Society', *M.L.R.*, 62 (1967), pp. 451–458. テクストのヴァリアントにかんしては、それらの「水平の」そして「垂直の」関係とともに、*Studien* の各所に詳細な分析がある。

3）TB, 785. *Die literarische Welt* に発表されたインタビュー（1926 年 4 月 30 日)。

4）以下を参照のこと。Albrecht Schöne: Zum Gebrauch des Konjunktivs bei Robert Musil. In: *Euphorion*, 55 (1961), S. 196–220; Jürgen Schröder: Am Grenzwert der Sprache. Zu Robert Musils *Vereinigungen*. In: *Euphorion*, 60 (1966), S. 311–334; Ernst Kaiser/ Eithne Wilkins: *Robert Musil. Eine Einführung in das Werk* (Stuttgart 1962), S. 159f. そこでの引用例に次のものを付け加えてもよいだろう ── „Man kann alles so kurz sagen, wie es mich freut.“（TB, 264)。

5）TB, 894.『特性のない男』第 1 巻第 115 章（1930 年）内の草稿段階における段落（1927 年）の改稿については、Schröder: Am Grenzwert der Sprache で言及されている。

6）ここで触れている、草稿と出版された『特性のない男』それぞれにおける〈少佐夫人恋愛事件〉の関係の予備的な議論にかんしては、Kaiser/ Wilkins: *Robert Musil*, S. 81 および第 4 章の各所を参照せよ。

7）創作メモにおける「ウルリッヒ、ないしはローベルト・ムージル風に（à la U bzw. RM.)」といった言い回しは 1938 年以降次第に頻繁に現れてくる。

8）いまのところイタリア語訳でしか出版されていない。*L'uomo senza qualità*, terzo volume, A cura di Eithne Wilkins ed Ernst Kaiser, Introduzione di Cesare Cases, Traduzione di Anita Rho (Torino, 1962), pp. 425ff. 第 59 章の草稿は大幅に修正されている。この章は、1938 年にドイツのヴィーン占領で出版ができなくなったときにゲラ刷りされた第 39 章から第 58 章に続く章である。第 47 章以降の一連の章がのちに改稿されたとき、第 59 章の内容は〔清書稿の〕第 48 章と第 52 章の両方で使われている。

9）〈別の状態〉という用語（概念ではなく）── 活力と関心の低さ（Gleichgültigkeit）とによって特徴づけられる n.Z.（normaler Zustand）と対立するものとしての a.Z.（anderer Zustand）── は、恍惚状態についてのムージルの知識とともに、ルートヴィヒ・クラーゲス『宇宙生成的エロース』（1921 年〔正しくは 1922 年〕）と、彼が多くのメモをとった文献に由来している（Heft 21、1923 年〔クラーゲンフルト版では 1920 年晩秋－1926 年〕)。神秘の言語についての彼の知識の大半はマルティーン・ブーバー『忘我の告白』（1909 年）から得ており、そこから彼は多くの引用もおこなっている（*Studien*, 450ff., Kaiser/ Wilkins: *Robert Musil*, S. 334)。E・フォン・ハルトマンと、エルンスト・ク

レッチュマー『医学的心理学』（1922年）にも依拠していることがさまざまなメモからわかる。このテーマについての簡潔だが価値ある概括については、Aloisio Rendi, *Robert Musil* (Milano, 1963), pp. 173ff. を参照。

10）これと実質的には同じ会話が、第46章「白昼の月光」と〔清書稿の〕第48章「汝自身を愛するように隣人を愛せよ」に再び現れている。

11）〈遥かな愛〉はクラーゲスから借用した言葉である。

12）ムージルの作品に限らず、月は〈遥かな愛〉の象徴である〔＊3〕。

13）Geschichte という語を訳すのは困難である。というのも、histoire のように、この言葉は「なにかの、またはなにかについての物語」と「なにかの出来事」の両方を表すからである。少なくとも第32章においてはこの言葉は姦通の意味での「だれかとの情事」ではないが、これを「なにかの出来事」と訳すという主張は十分に説得力のあるものだとは思われなかった。作者がはっきりと mit という前置詞を使っているからだ。

14）〔この引用部の「愚者」とは原文のドイツ語 Narr の訳であるが、本論文におけるウィルキンズの英語の訳では a lunatic となっており、この註14も lunatic という語にかんする註である。〕『特性のない男』第1巻第29章。性交が狂気と結びつけられている箇所はほかにも多くある。初期の草稿や計画では、主人公は小説中のほとんどすべての女性（クラリッセ、ゲルダ、ゲルダの母、大佐の仮装に身を包んだディオティーマなど）と多少サディズム的な性的関係をもっている。『特性のない男』第1巻第119章でのゲルダの誘惑は、1930年の第1巻の完成直前に失敗に終わることとなった。

15）ウルリッヒの考えの変化はムージル自身の考えの変化を反映している。メーテルリンクからの引用は1921年末あるいは1922年初頭のメモにあり（Heft 21〔/38-45, クラーゲンフルト版では1921年初頭－1922年末〕、PD, 680ff. を参照）、「鶏姦者の魂」や「すべては目に見えない原理によって定められている」（『特性のない男』第1巻第32章）という語句を含んでいるが、それはアガーテによって、あるいはアガーテとの関連で用いるためのものであった。アンダースとアガーテは（目に見えない原理という）「この根底にある考えと結婚とのあいだで揺れている」。ここで言う結婚とは近親相姦である。「黙っている子ども」〔＊4〕という引用はディオティーマのところで使われるべく予定されていた。彼女はアンダースに自分と一緒に「黙っていて」ほしいと頼むことになっていたが、『特性のない男』第1巻第105章では、それはアルンハイムの役目になった。『特性のない男』において、ディオティーマとアルンハイムの性的関係のない「崇高な愛」はアガーテとウルリッヒの愛の意図的なパロディーである。1928年1月になってようやく、「鶏姦者の魂」や「無垢な魂」（『特性のない男』第1巻第32章）についての言葉は、アンダースが初めてディオティーマを訪問したときに彼女が発することになっている。

16）科学にたいするムージルのアンビヴァレントな姿勢の表れである。科学の言語はけっして「高圧的」ではなく、謙虚で冷静なものだ。

17）決定的かつ最終的な「これを最後に（ein für allemal）」とは、ムージルがこの小説をある方向に進展させようとしていたが後に取り消されたことを示す多くの事例のひとつである。彼のプランはつねに流動的なのだ。プロットを左右する兄と妹の近親相姦について書かれた初期のメモと比べてみよう。「彼らはさしあたり愛は求めていなかった。そうではなく兄妹らしさが彼らの気に入った。あとできっとわかるだろう（Später wird man ja sehn）」〔Mappe VII/17/72〕。この man については〔Kaiser/ Wilkins:〕*Robert Musil* を読んでいただきたい。〔この man とは当時のヴィーンの人びとを指している。〕小説のこのテーマへの不審の念は、30年代半ばにおいてさえもヴィーンのサークルで広く共有されていた。あわせて *Studien*, 234f. も参照。

18）PD, 99. 1925年頃〔クラーゲンフルト版では1923-1924年〕の「創造的モラル」という見出しのメモ

と比較してみよう。「a.Z. は（K. *Medizinische Psych.*〔クレッチュマー『医学的心理学』〕）夢と、そしてその夢をつうじて古い意識の形式と、大いに似かよっている。｜そのような意識の形式に相応するのが創造的モラルだ。それは詩の状態である［……］｜それゆえこの研究は実際、詩人の擁護に通じているのだ」〔Mappe VII/11/158〕。

19）そのメモ（1923 年頃〔クラーゲンフルト版では 1921 年初頭－1922 年末〕）には「イタリア（Ital. [ien]）」というコメントがついている〔＊11〕。

20）すでに引用した「夜の会話」の一節と比べてみよう。この両極性の理論的なモデルは、たとえばエッセイ「詩人の認識のスケッチ」（1918 年〔クラーゲンフルト版では 1918 年初頭－1919 年初頭〕）にみられるが、ムージルがアードラー派の心理学者による精神分析を受けはじめた 1928 年以降、このモデルにアードラーの影響がみられることがしばしばある。Rendi, *Robert Musil*, p. 85, note 3 を参照。

21） 彼の「忘れられていた」妹のことを言っている。妹の存在は、〈別の状態〉がこれから実現することを示している（『テルレス』、PD, 78 と比較されたい）。第 2 巻第 13 章で、ウルリッヒは第 1 巻第 123 章における「少佐夫人の発作」がアガーテとの出会いを予告していたのだと認識する。

22）註 14 を参照。

23）科学は宗教とも官能とも両立しえないものであるため、「科学的な（scientific）」は「荒涼とした（bleak）」を意味すると読まねばならないことがしばしばある（常にそうだというわけではないが）。これは〈別の状態〉と対比された〈通常の状態〉である。註 9 を参照。

24）彼は我知らずウルリッヒの考えのパロディーになることが多々あり、この小説の草稿段階における主人公の考えを代弁している。

25）1931 年 9 月（？）〔クラーゲンフルト版では 1931 年 7 月－1932 年 1 月〕の、「彼は千年王国と呼んでいるものを思い描こうとする」と題されたメモには次のようにある。「彼が少佐夫人恋愛事件を思い浮かべようとするのはごく当然なことではないのか？　しかしさしあたり性愛は抜きだ。ただし、相手にたいしてたいへんやさしい」〔Mappe II/1/232〕。

26）MOE「遺稿部より、第 3 部の結末と第 4 部」第 60 章にあるように、「最善の（allerbesten）」ではない〔＊12〕。この箇所と手稿（第 49 章「思索」の草稿）の比較資料にかんしては、*Studien*, 408-420 を参照。

27）最初の S 手稿は 1924 年にさかのぼる〔クラーゲンフルト版では 1923 年〕。タイプ原稿の最初の 100 ページは 1925 年末に出版社に送られたが、どうもこれは「小説ではない」という理由ではねつけられたようである。その後ムージルは新たなプロット案にもとづいて原稿をふたたび書きはじめ、登場人物の名前をいくつか変更した。1927 年（それ以前とはいえないまでも）には彼は小説を 2 巻に分けた。新たなタイトルは 1927 年 12 月（8 月とはいえないまでも）には決められた〔＊17〕。心理療法を受けていた 1928 年の秋に新たなスタートを切って、ムージルは主人公の名前をアンダースからウルリッヒに変えた。

28）その箇所は山括弧で指示している。

29）たとえば、弁護士についての話のときにアンダースが引用した「締めつける（in die Schraube nehmen）」云々という言葉は（一見するとイタリアのファシズムについての 1924 年の論説からのようだが〔Mappe VII/11/57, クラーゲンフルト版では 1923 年春〕）、第 1 巻第 72 章に現れている。「僕は、やあ兄弟といって雄牛に話しかける」のヴァリアント（雌牛にたいして「あなた」と言う）も同様である。〈別の状態〉にあるアンダースにとって「原罪はなかった。邪悪なことはそもそも考えられなかった」。第 2 巻第 12 章のアガーテの場合、「そのとき自分自身は卑しい振る舞いができないが、それだけではなく［……］」。しかし第 2 巻第 22 章の少佐夫人への言及後の一文において、実際それに相当するものは「ウルリッヒは「堕罪」や「原罪」を信じていたということ」であり、ウルリッヒ

は人間の堕落した状態と恋から冷めた状態を同一視している。鐘が鳴りはじめる直前にアガーテはアンダースを非難する。「あなたは私に向かって、私がＤ［ディオティーマ］であるかのように話しかけるのね。あなたのやることなすことが私をひどく苦しめるの」。第２巻第38章でアガーテは、ディオティーマやほかの人たちと話すウルリッヒを見つめながら似たような嫉妬を覚え、「ウルリッヒにかんするものすべてが彼女をいまふたたび苦しませた」。この「ふたたび」は第30章および第31章の彼女の苦悩を指して言っているにちがいない。

30）ムージルの「小説の時系列（Romanchronologie）」についての詳細な研究の公表が待たれる。

31）第２巻第11章と比べてみよう。浅瀬を歩いて渡るのをやめ、溺れる人の怯えた身振りをしながらも、自分の背丈より深いところへ、つまり「かなり危険な深み（eine ganz unsichere Tiefe）」へと入っていく次元が、魂においては存在する。第２巻第25章では、目を閉じたアガーテの顔はウルリッヒを「どこまでも終わることのない深みへと（in eine nirgends endete Tiefe）」引き寄せるように感じられる。第18章と第22章を読みあわせることで、自分が最も望んでいることにたいして抱くこの恐怖にウルリッヒがどのように対処しているかがわかる〔＊24〕。第38章の末尾ちかく、「この瞬間」もはや死活にかかわる「冒険」を恐れなくなった場面では、彼は妹を「長いあいだ」見つめる。「会話の生き生きとした動きがみられるが、より深いところではそれになんら心動かされることのない顔」を。会話は、〈別の状態〉という湖あるいは海の静かな水面に立つさざ波にすぎない。

［訳註］

＊1　おそらく、PDの前書きでフリゼーの言う、「最近の手紙用メモ（Letzte Briefkonzepte）」と題された「メモ帳（Schmierheft）」のことを指しているのだと思われる（PD, 8）。これの一部は「手紙と下書き（Briefe und Briefentwürfe）」の項（PD, 723ff.）に収められている。クラーゲンフルト版に「最近の手紙用メモ」と題されたものは見当たらなかったが、これに言及しているウィルキンズのメモ（Mappe III/8/0）によれば、ムージルの死後成立した „Mappe III/8“ の「なかに、ローベルト・ムージルの「最近の手紙用メモ」がある」と記されている。そしてこの「最近の手紙用メモ」とは、フリゼーの記述から判断するに、おそらく冊子（Konvolut）の形になった „Briefkonzepte III/51-69“ のことを言っているのだと思われる。ただしこのメモ帳が „Briefkonzepte“ に含まれることになった経緯にかんしては不明。

＊2　ウィルキンズがここで言っている「プロット案」とは、自身の1967年の論文 ‘The Musil Manuscripts and a Project for a Musil Society’ で述べられている「E（Erlöser）案」ないしはそれをもとに作られた「S（Schwester）案」のことであると思われる（Heft 36/49を参照。ローマ数字に加えてＡからＫのアルファベートが付されているものがウィルキンズの言う「E案」であり、その下にある、IIというローマ数字の右下にＩからVIIのローマ数字が付されているものが「S案」である）。それぞれのプロット案は何段階かに分けられており、E案は10段階、S案は７段階である。絶筆となった清書稿の第52章「ある夏の日の息吹」は、それぞれのプロット案に照らしあわせると、E案では第４段階、S案では第３段階に位置している（Eithne Wilkins, ‘The Musil Manuscripts and a Project for a Musil Society’, *M.L.R.*, 62 (1967), pp. 451f.）。ウィルキンズはこれら二つの案の成立年を区別していないが、最近の研究では「E案」の成立は1925年以前、「S案」の成立は「章群」がはじまった1928年だとされている（Walter Fanta: Die Entstehungsgeschichte des „Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil. Wien 2000, S. 270f.）。

＊3　たとえば『特性のない男』第２巻第25章においては、失われた自分の片割れとの本質的な一致は「寝室の窓から望む月のように」遠いと言われている。象徴としての月は、〈遥かな愛〉に不可欠な性

的接触忌避に親和的な意味をもっている。たとえば月の神であるギリシア神話のアルテミスや彼女と同一視されるローマ神話のディアーナは、神話ではうら若く美しい処女の女神として描かれている。また純粋かつ貞潔な処女マリアはやさしい月の光に照らされて神々しい姿をあらわしている（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』（1960）および Horst S. und Ingrid G. Daemmrich: Themen und Motive in der Literatur (1987) より）。

＊4　「黙っている子どもは、話しているマルクス・アウレリウスよりも千倍賢明だ（Das schweigende Kind ist tausendmal weiser als der redende Marc Aurel）」という、メーテルリンク『貧者の宝』からの引用のことを言っている（PD, 682）。

＊5　この引用部のドイツ語 abschreckend と ein für allemal についてのウィルキンズの解釈には疑問がある。„Brockhaus-Wahrig“ (1980–84) によれば、abschrecken とは「…することを引きとめる、…をやめさせる（von etwas zurückhalten, abbringen）」という意味であり、ein für allemal とは「いつまでも通用することを一度だけ（einmal, das für immer gilt）」という意味である。ウィルキンズは両者をともに文字どおりの意味でとり、die abschreckende Kraft を「（行為をやめさせる）たじろがせるような力」と、ein für allemal を事実としての「これを最後に」という意味で解釈している。しかし、この文章はウルリッヒが少佐夫人体験を思い出し、これからその体験が語られる導入部となっていることを念頭に置いておく必要があるだろう。この引用部につづくウィルキンズの解釈では、この文章は、過去の体験がウルリッヒをたじろがせたため彼は今後二度と神秘主義の世界に帰ることはなかったという、体験後の状況がことさらつよく示唆されたものになる。だがこの文章の置かれた文脈を考えあわせると、ここでは言葉を字義どおりにとるのではなく、むしろ比喩的な解釈をしたほうがよいのではないかと考えられる。abschreckend のここでの用法は具体的な「行動の抑止」という意味に忠実なものではなく、むしろこの体験のもつ力が相手をたじろがせるほどのものであるという、力の程度を表す意味であろう。また、ein für allemal については、その力の強さがこれ以上ないほどのものであるという比喩的な意味での「これを最後とばかりに」という意味であろう。これを踏まえてこの引用部を訳しなおしてみると、こうなる。「はっきりとわかってしまったのだ。なんと奇妙で、滑稽なほど魅力的な体験が、その圧倒するような力でこれを最後とばかりに、似たような体験をすべて押しのけてせり出してきたことか」。ウィルキンズは以下にさまざまな問いを立ててそれが不可解だと言っているが、それはそもそも問いの原因となった一節の解釈が誤っているからだと思われる。

＊6　ウィルキンズは本論文で „Wissenschaft“ を一貫して「科学（science）」と解しているが、ウルリッヒは科学者ではないので、「学問」と解するほうがよいと思われる。原註 16 の「科学」についても同様。

＊7　ここでウィルキンズがとりあげているドイツ語の一文は以下のとおり。„Die Liebe der Frau Major und des zu jungen Leutnants blieb auch in ihrem ganzen Ablauf kurz und unwirklich.“ ウィルキンズは „kurz und unwirklich“ が二語一想ではないと推測したうえで文の構造を変えて意味をとっているが、そのような無理な解釈をせずとも二語一想として捉えられるのではないだろうか。訳してみるとこうなる。「少佐夫人と若すぎる少尉との愛はその経過全体においてもはかなく非現実的なままだった」。

＊8　現在のダーダネルス海峡のこと。ギリシア神話において、プリクソスとヘレーの兄妹は、父アタマースの後妻イーノーに憎まれ偽の神託によって殺されかけるが、先妻ネペレーの助けで金毛の羊に乗ってイーノーから逃げた。しかしヘレーは眩暈がして海中に落ちてしまう。ヘレーの名をとって、その場所はヘレースポントス（ヘレーの海）と名づけられた（高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』より）。

＊9　『特性のない男』では、そこが地中海の島だとは述べられていない。Kaiser/Wilkins: Robert Musil においてもこの島は地中海の島だと言われているが（S. 81）、典拠はどこなのか不明である。おそら

くウィルキンズは「楽園への旅」を想定して言っているのであろう。

＊10　ウィルキンズはここの vergoldete を「金ぴかの」という皮肉な意味だと解釈しているが、わざわざ皮肉だととらずとも、ここは太陽の金色の光を表す「燦然たる」という意味だと思われる。

＊11　この「イタリア」とは、おそらくアンダースとアガーテのイタリアへの旅のことを指していると思われる。

＊12　1952年に出版されたフリゼー編『特性のない男』は、1965年2月の第6版において、*Studien* にもとづいた修正が施されている（川村二郎「解説」、『特性のない男』第5巻所収、新潮社、1966年）。原註54にかんしても同様。

＊13　ウィルキンズの言う「三つの手稿」とは、„s_3+n-1“、„s_3+9“、„9. A-Ag.“ のことである。これらは「1925年某日から1928年10月のあいだに書かれた」と言われているが、現在では „s“ 草稿が書かれたのは1923–25年初頭であると見なされている。「1928年10月」というのは、主人公の名前がアンダースからウルリッヒに変わった時点のことを言っていると思われる。ウィルキンズは „s_3+9“ を「現存しない」（336頁）ものだと見なしているため、ここで「うち二つは恋愛事件のヴァリアントを含んでいる」と述べているのは、この三つのうち自分自身で確認できた „s_3+n-1“ および „9. A-Ag.“ の少なくとも「二つ」は「恋愛事件のヴァリアントを含んでいる」という意味であろう。

＊14　本論文でウィルキンズは „s“ 草稿の „s“ を大文字で表記しており、翻訳はそれにしたがった。フリゼー編全集に収録された „s“ 草稿の „s“ は小文字で表記されており（GW. Bd. 1）、以降の研究では „s“ は小文字で書くことが通例となっている。

＊15　ウィルキンズは „s“ 草稿の „s“ を、「双子の妹（Zwillingsschwester）」の省略としての「妹（Schwester = Sister）」の頭文字だと考えている（Wilkins, 'The Musil Manuscripts', p. 454）。„s“ 草稿の „s“ がなにを指しているかは現在においても定かではないが、クラーゲンフルト版の解説によれば „Schwester“ あるいは „Skizzen“ の頭文字だとされている。

＊16　„s_3+9“ が「現存しない」ものだというのは、おそらく「その後に書かれたもうひとつの手稿」（＝二つ折りにした二面付けの裏表の紙二枚）の二枚目にある „s_3+9“ というムージルの書き込みを、この „9. A-Ag.“ とは別に存在する „s_3+9“ というテクストへの参照指示であるとウィルキンズが解釈したために起こった誤解であると推測される。

＊17　ウィルキンズがどのような意図で「（それ以前とはいえないまでも）」、「（8月とはいえないまでも）」と言っているのかは不明だが、「特性のない男」という言葉は遅くとも1927年初めにはムージルのメモに現れており、1927年夏には小説にこのタイトルを冠することが決まっていた（Fanta: Die Entstehungsgeschichte, S. 305）。

＊18　„s_3+9“ および第2巻第3章群という呼称における3という数字はそれぞれ全6段階に分けられた „s“ 草稿と、全7段階に分けられた章群の三つ目の部分を意味している。

＊19　本論文でウィルキンズは „9. A-Ag.“ のことを、ピリオドを打たない „9 A-Ag“ という形で書いており、翻訳はそれにしたがった。その後 „Musil-Kommentar“ では、„9. A-Ag.“ とピリオドを付けた形に変更されている（Hermut Arntzen: Musil-Kommentar zu dem Roman »Der Mann ohne Eigenschaften«. München 1982, S. 55）。

＊20　クラーゲンフルト版のトランスクリプションにおいては fern ではなく fein になっているが、文脈から考えてここではウィルキンズの読みの方が正しいと思われる。

＊21　＊20と同じくクラーゲンフルト版においては es ではなく er になっているが、本文中に er の指し示すものが見当たらないため、ここでもウィルキンズの読みの方が正しいと思われる。

＊22　11月1日というのは、おそらく „Mappe II/1/204“ の「思案、„II III 9“ が引っかかった」という1928年11月1日の記述にもとづいているのではないかと思われる。しかし、„9. A-Ag.“ が置かれて

いるのは「カバーでは10に修正された」(336頁)とあるように第2巻第3章群第10章(= „II III 10“)であり、同時に成立した„Mappe II/1/203“においてムージルは„II III 10“にかんして„9. A-Ag.“と同様の内容を語っているため、ここで言う„II III 9“とは„9. A-Ag.“のことを指しているのではない。ここで話題になっているのは、„II III 9“と題された„Mappe VII/1/159“のことだと推測される。また、11月14日というのは、おそらく„Mappe II/1/205“の11月14日の記述に、„9. A-Ag.“の内容を「30/32章にするのもよいかもしれない」と書かれていることにもとづいているのではないかと思われる。しかし、「1928年11月14日になって、〈少佐夫人の物語〉はひとまず『特性のない男』第2巻第15章の前身の一部を形づくることになった」という記述については何にもとづいてのものなのか不明。

＊23 「きわめて粗野な」、「きわめて凡庸な」という表現は„9. A-Ag.“中には見出されない。

＊24 第2巻第18章の、ウルリッヒがアガーテに遺言状偽造の危険性を説く手紙を書こうとする場面と、第2巻第22章の、アガーテとともに千年王国に参入するという宣言をウルリッヒが思い返す場面のことを言っているのではないかと思われる。どちらの章でもウルリッヒは神秘的な状態のほうにひかれているが、彼の理性はすぐにその感情を滑稽なものだと見なしてしまう。

＊25 クラーゲンフルト版では„Mappe VII/9/122–130“を„s_3+9“と呼んでいるが、„Mappe VII/9/130“にはウルリッヒを意味するUという記号が出てくるため、主人公の名前がまだアンダースであった„s“草稿の時期にこれが書かれたはずはない。よって、„Mappe VII/9/130“は„s_3+9“の一部だと見なさない方が適切であろう。